

迄お迎えに参ります。  
長らくお世話下さった御礼と会員の皆々

なりました。何卒御後援をお願いします。  
従って振替口座も次のように変更しました  
振替口座長野 11.022 番



北条氏直書状

(高坂家文書)

其表及勢遣候処早々忠信感悦候  
弥向後別而走廻專一候猶安房守可  
申候恐々謹言  
(北条氏邦)

(天正十年)  
九月十二日 氏直(花押)

大草休斎

「北条氏直書状(高坂家文書)」

(伊那路 第8巻5月号、上伊那郷土研究会編、小口珍彦著)

## 北条氏直書状解説

天正十年武田氏討伐の織田軍は、三月二日高遠城を陥れ甲州に入、三月十一日天目山の麓田野で勝頼一家を自刃させて、中世から連綿としてつゞき、戦国時代には日本における屈指の雄であった武田氏を滅した。信長はおくれて同十八日に高遠城、翌十九日には上諏訪に入って法華寺に陣し、甲信の処分をして四月二日には諏訪を出発、甲斐・駿河から東海筋を西して、近江の安土へ帰ったのである。しかも帰城間もなく中国筋で毛利氏と対陣していた豊臣秀吉から救援を乞われ、席温まるいとまもなく出陣、京都の本能寺に宿したところを、明智光秀の叛により、六月二日ついに滅亡するに至った。武田氏攻略後僅かに八十余日を経たのみである。

信長によって甲信各地に封ぜられた諸將はこの変にあつてみな急遽西に逃れ、一時甲信は無主の地となった。これを見た隣国の諸將はこれを好機と四方から侵入して来た。すなわち北からは越後の上杉景勝・東からは北条氏政・南方からは徳川家康がそれぞれ軍勢を進め、また土豪の懷柔を図った。いち早く氏政は東信地方を略し、景勝は北信を掌握し、家康は南信濃を手中に収めようと策略を廻した。ここで伊那・諏訪は北条・徳川両氏の対抗地となり、激しい争

いの場となった。そして北条氏が一步先んずる形勢で、諏訪・保科の両氏などもはじめ北条色が濃かった。

大草休斎は大草に本拠をもつ香坂氏で、大草や中沢に多くの家中をもつ一土豪であった。そして今次の争いには北条・徳川の両方から誘いをかけられたにちがいないが、まず北条氏に加担したらしくこの書状は氏政の子氏直のもの、年号はないが天正十年で、九月といえは諏訪で北条・徳川の対陣中である。文中「及勢」とあるは「追勢」で兵力増強の意味、その際「早々忠信感悦」とあつて、休斎が若干出兵したようにも解され、なお向後の尽力を慫慂されている。

「猶安房守可申候」とある安房守は氏政の弟氏邦で鉢形城主、主として信州の土豪懷柔の任に当つたもののよう、文意ではこの安房守自身かその使者か休斎のもとへ直接持参したことを示している。

恵林寺文書によれば、これよりさき、七月六日には休斎は下条頼安を通じて家康に忠節をつくすことを誓う起請文を出していて、乱世における土豪の保身のための苦肉策を物語っているが、十月二十九日に至って諏訪の両軍の和談が成立、信州の大部は徳川氏が領有することになったので、自らその帰属も定つたものと思われる。